

RA カフェについて

斎藤 学

「RA カフェ」は私（精神科医・斎藤学）とともに精神療法について学ぶ講義形式の会です。最近のテーマは「心的外傷体験とその治療」ですが、2月以降もその続きです。この会ではブタペスト学派と呼ばれる3人（シャンドール・フェレンティ、シャンドール・ラドー、マイケル・バリント）について紹介し、それぞれがかなり明確にフロイトの超克ないしフロイトからの離脱を謀りつつ現代の外傷理論という「運河」を掘削したことを紹介しようと思います。ちなみに土居健郎『甘えの構造』にたびたび引用されていて日本でも広く知られるようになったマイケル・バリントも実はブタペスト生まれのユダヤ系ハンガリー人で、母国での名前はバリント・ミハイ (Bàlint Mihály) であったそうです。

私は医師になって最初の数年の対象がアルコール依存症であったこともあり、ラドーの「薬因性オーガズム」や自体愛概念については早くから識っていました。筆者の初期の論文を集めた本を参考書に挙げているのはそのためです。

心的外傷体験は19世紀後半、鉄道事故やクリミヤ戦争の勃発から徐々に注目を集めようになり、やがてサンタンヌ病院（パリ）に入所させられていたヒステリー患者の病態が関心を集めました。20世紀も後半になってようやく、家族内にはびこる父権主義的圧制がもたらす父・娘近親姦とその周辺の問題、更にはレイプ問題の受難者に対する社会一般（その表現としての警察の対応）の冷たさないし無関心へと注目の範囲が拡大してきました。

それに即して初期の戦争神経症や戦闘 PTSD から、家族内外からの性的加害を浴びた被害女性たちに見られる PTSD、更には家族内で世代経由的に学習される加害・被害構造や若年者にも見られる複雑性 PTSD の問題などにも遂に焦点が当たり出しているというのが現在です。一度にはここまで話しを進めることは出来ないと思いますが、参考書としては、この辺について論じているものも挙げておきます。

〈参考書〉

- ① 森茂起「フェレンツィの時代」人文書院、2018年
- ② シャンドール・フェレンティ・「臨床日記」（翻訳）森茂起、みすず書房、2000年
- ③ マイケル・バリント（翻訳）中井久夫「治療論からみた退行—基底欠損の精神分析」、金剛出版、1978年
- ④ マイケル・バリント（翻訳）中井久夫ら「スリルと退行」、岩崎学術出版、1991年
- ⑤ 土居健夫「甘えの構造」、弘文社、1971年
- ⑥ 斎藤学「アルコール依存症の精神病理」、金剛出版、1985年
- ⑦ 斎藤学「封印された叫び」、講談社、1999年
- ⑧ ジュディス・ルイス・ハーマン（監訳）斎藤学「父-娘近親姦」、誠信書房、2000年
- ⑨ ジュディス・ルイス・ハーマン（翻訳）阿部大樹「真実と修復」、みすず書房、2024年
- ⑩ ダイアナ・ラッセル（監訳）斎藤学「シークレット・トラウマ」、IFF出版部ヘルスワーク協会、2002